

## 平成27年度第4回観察会 記録

日 時	平成27年10月7日(水)～9日(金)
観察地	(1) ひこばえの森、(2) 西舞根水産養殖場、(3) 舞根森海里研究所、 (4) 大谷海岸、小泉海岸、(5) 輪王寺、(6) 千年希望の丘
講 師	1=室根町第12区自治会長 三浦幹雄氏 2=森は海の恋人副理事長 畠山 信氏 3, 4=プロジェクトトリアス代表 三浦 友幸氏 5=輪王寺住職 日置 道隆氏 6=森の防潮堤協会事務局長 園田 義明氏
テー マ	「森は海の恋人」のふるさと、気仙沼を訪ねる
備 考	参加者数 25名、スタッフ 岸三、薬師神、渡辺、飯田 記録 飯田

### 第一日目(10月7日)

#### 1. ひこばえの森交流センターにて三浦幹雄さん(右写真)のお話

(自治会小山さん、一関市産業経済課千葉課長同席)



- (1) 室根町矢越地区の概況: 93所帯332人。高齢化率35%で岩手県では低い方で、比較的若さがある町。主な産業は農業などの第一次産業。
- (2) 植樹活動: 畠山 重篤さんとの出会いから始めたひこばえの森への植樹活動や植樹祭の経緯説明。平成元年から始めた植樹祭の参加者は当初50~100人程であったが、現在全国から約1500人が参加する大イベントに成長。「森は海の恋人」活動は町の宝であり、住民の誇りとなっている。行政に頼り切るのでなく、できることは自分たちでやる方針で町の運営をしている。
- (3) 室根神社特別大祭: 今年10月に4年に一度の室根神社特別大祭が行なわれる。古代からのお祭りの形式を今に伝えるお祭で、国指定重要無形文化財。神前に捧げる御神水は舞根の海から汲んだ海水で、古人はこのような形で森と海を結びつけていたのであろうかと畠山重篤さんは自著「森は海の恋人」で述べている。是非見学に来て欲しいとお説きがあった。

#### 2. ひこばえの森を三浦さんの案内で見学

ひこばえセンターから徒歩で約20分程のところにある矢越山(市有林)に、平成5年から毎年6月第1日曜日に行なう植樹祭は今年で27年目。約15haの山地にミズナラ、コナラ、カツラなど44種の落葉広葉樹約3万5千本を植えたひこばえの森を見学した。

#### 3. 「シニア自然大学校の森」に植樹

ひこばえの森からの帰途、三浦さんの持ち山の一画に今回参加の25名が計30本を植樹した。このエリアを「シニア自然大学校の森」と名付けるので、毎年植樹にきていただきたいとのこと。

### 第2日目(10月8日)

西舞根養殖場、舞根森里海研究所及びその周辺を畠山 信さんの案内で見学



#### 1. 舞根地区の震災被害状況と対応

- (1) 津波は電信柱より更に5mも高い15mで舞根地区を襲い、舞根の集落は高台にあった数軒の家以外全て流され、被害は52軒中44軒におよんだ。死者4名(信氏の祖母も津波の犠牲に)。カキ筏など全て流出。
- (2) この地区はいち早く高台移転を決意し25軒が移転しつつあるが、個人負担大であり、住民年齢構成からみて20年先はどうなるかという問題がある。
- (3) 舞根地区には当初9.9mの防潮堤が建設される計画であったが、住民の意見は建設しないことで一致し、平成24年5月に要望書をとりまとめて市に提出し、防潮堤は建設しな

いことになった。早期に合意形成できた要因は地区の長老の意見が尊重される土地柄によるとのこと。

#### (4) 自然の回復

① ところにより地盤が約1m沈下し、海水が川を通して流入して塩性湿地化している場所（右写真）を見学した。ここにアサリ、ウナギ、ハゼなどが棲息するようになり、冬には水鳥が訪れるようになった。白鳥が舞い下りたこともあるという。1940年代、ここは干潟域でアカガイやアサリが沢山とれたが埋め立てて宅地や農地に変えられた所で、震災でもとの姿に戻った。この湿地約1万m<sup>2</sup>を畠山家が購入し、環境教育フィールドとして保存することにしたとのこと。



② コンクリート製の護岸が破損し隙間にウナギが棲みついたり、地盤沈下で満潮時水没するコンクリート岸壁の上にたまたま砂にアサリ稚貝が群生するなど、津波で地盤沈下や工作物が破壊された結果、昔見られた自然が回復しつつあるとのこと。

### 2. 舞根森里海研究所にて：畠山さんからレクチャー

(1) 研究所は千年に一度といわれる巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と、回復過程を科学的に追跡していくため、京都大学フィールド科学教育センター、日本財團により建設され、2015年4月にオープンした。所長は田中 克先生。2千人／年の見学者がある。



舞根森里海研究所

(2) 「海とともに生きる」、「震災復興と森は海の恋人」をP・Pで説明。

1) 信氏は津波が来たとき船を沖合に待避させようとして津波にのみ込まれたが自力で対岸の大島に泳ぎ着き九死に一生を得た。このような時、泳ぎ方は古式泳法がよいという。

2) 震災後の海中の様子

- ① 2011. 5月：ホンダワラが油を被っている。油を分解する微生物のコロニーが認められる。
- ② 2012. 5月：海に生物が増えてきた。
- ③ 2013. 5月：ほぼ生物が回復（全く同じではないが）

3) カキの育て方のポイント

- ① カキの養殖は、カキ母貝から生み出された浮遊幼生をホタテ貝の殻で作った付着器に着底させて種苗（稚貝）とし育てる。稚貝は宮城県石巻湾産を使用する。石巻産は成長が早く、病気に強く、味がよいと3拍子揃い、世界的に有名で海外にも輸出しているという。
- ② カキは年に1、2回、70℃程の風呂に入れてやるとカキに付着しているムラサキイガイなど、カキ以外の生物が死滅し、成長が早くなり殻も丸くなつて形がよくなる。

4) 食物連鎖

カツオ1kg = イワシ10kg = 動物性プランクトン（オキアミ）100kg = 植物性プランクトン 1000kg の食物連鎖の関係があるので、もし水俣病のように有毒物で汚染された環境で育つ魚は高濃度に汚染される結果となる。

5) 海水中のプランクトン観察

研究所前の海水を採取器でこし取り、動物性プランクトン、植物性プランクトンを検鏡し見せてもらった。植物性プランクトンを観るのは始めてであったが、その形は幾何模様のようで印象的であった。

※この日、台風23号の影響で警報が発令され、予定していた舟に乗ってカキ筏を観察することができず、残念でした。

## 3. 気仙沼市の防潮堤建設の問題点：プロジェクトトリアス代表 三浦 友幸さん

## (1) 大谷海岸

1) 三浦さんは元塾講師であったが、震災で家が流出し母が行方不明となったので、捜索活動しながら仮設住宅のコミュニティづくりをしている時、国の防潮堤建設計画を知った。それによると、「福島県から岩手県に至る約400kmの海岸に巨大津波対策として10~15mの防潮堤を建設する」という。大谷地区には、環境省が“快水浴場100選”に選定した大谷海岸海水浴場があるが、ここには高さ9.8m、土台幅45mのコンクリートの防潮堤を全長1kmにわたり建設する」というものであった。

2) 防潮堤建設に対する住民の意見はさまざま、建設反対の人もいれば津波が怖いので必要という意見もある。漁師は海を守りたいので巨大な防潮堤は困るといい、農業者は行政ともめるのは嫌、行政は対応が遅れると予算から取り残され、遅れ手になることを恐れているといふ。

3) このような状況の中で、住民同士が対立することは絶対に避けねばならないとの三浦さんたちの信念から、中立の立場で防潮堤の必要性を検討すべく「大谷里海づくり検討委員会」を立ち上げ、大谷地区民、県知事、市長、市会議員、学識経験者などに出席してもらい議論を重ねた。また、これから町作りを模索し町の行事にも率先して参加した。当初は冷ややかな眼で見ていた長老たちも次第に理解してくれるようになり、信頼関係を築けるようになっていったといふ。

4) 町の象徴である大谷海岸を埋め立てて作る防潮堤計画の見直しを目指して活動を続けた結果、住民の合意形成ができ、1324名の署名を添えて現在進行中の防潮堤計画の停止と見直しを市に提出した。

要望書を受け取った菅原市長は「現在の計画では砂浜は残らない。署名のような地域住民の意向が分かるものがあると大変ありがたい。強い説得材料になる」と、住民の意見を尊重して県や林野庁などに砂浜を残すよう働きかけると約束した。

5) 住民が要請し、市側が同意したのは防潮堤の建設予定地を砂浜から陸側に後退させる「セットバック案」で、防潮堤を海から離せば離すほど砂浜が守られる。津波や高潮の脅威は衰え、海拔も上がるため、構造物を低くして建設・維持費用を安くできる。だが、セットバック案を実行しようとすると、制度の壁が立ちはだかり今後も予断を許さない状況が続くと思われるとのこと。

6) 「検証が十分にされないまま公共事業が始まっている。若者や皆が知恵を出しあって、住民のための復興をしないとダメです」との話が印象に残った。

7) 気仙沼市長あての「大谷海岸周辺の整備計画に関する要望書」が私たちに配付された。現地の状況とともに三浦さんたちの思いを多くの人に伝えて欲しいとのことであった。



## (2) 小泉海岸

1) この地区に25mの津波が襲来、14.7mの防潮堤建設計画が示され、賛成派多数で工事が決まった。当初230億円の予算が示され370億円に修正された。

2) 防潮堤計画が進んだ理由は、「震災直後、防潮堤建設と高台移転はセットだと誤解して、防潮堤を受け入れざる得ないと思った住民が多くいたことによる。今は「防潮堤によって美しい海と暮らしが分断されるのが辛い」と反対を訴える声があるが工事は行われている。

3) 住民の合意形成には強力なリーダーシップが取れるキーマンが必要。しかしこの地区にはキーマンがいなかった。



小泉海岸で進む防潮堤工事

3日目（10月9日）

### 1. 輪王寺:住職日置道隆さんのお話

当寺は「北山五山」のひとつで、仙台伊達氏ともつながりの深い東北を代表する名刹で、かつて本堂へ登る参道は両側を杉並木が囲う莊厳なたたずまいであった。幹線道路の渋滞緩和のため、輪王寺の参



日置 道隆住職



杉並木の参道



現在の参道

道の真下にトンネルを掘ることになり、参道の杉並木550本を伐採した。住職日置道隆さんはこの参道に緑を復元するため、横浜国立大学宮脇名譽教授指導を得て「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」をめざし、平成18年から3年間に50種類1万8千本を植樹。檀家や市民とともに植栽した樹木は寺全体で3万3千本になった。苗木は順調に成長して立派な森になり、震度6の東北大震災でも植樹された木々はしっかりと根を張り、斜面を守り1本も倒れることがなかったという。

輪王寺は「いのちと心が廻る寺づくり」にいそしみ、供養花、朽ちた卒塔婆、落ち葉や間伐材、生ゴミなど寺から出る有機性廃棄物の全てを地球資源として再利用している。雨水は灌水用に、番犬代わりに飼育しているロバの糞は肥料にと、全てリサイクルして無駄にしない。また境内に、宮城県岩沼市の千年希望の丘に植栽するシラカシ、アカガシ、コナラ、サクラ、ケヤキ、カエデなどのポット苗を多く育苗していた。育苗は寺職員の他、市民のボランティア活動にも頼っているとのこと。

「いのちを守る森の防潮堤」構想をもとに、CGシミュレーション技法を駆使し、森の力を表現した映像「震災後の日本人」を観賞した。自然を活かした防災、減災が世界から評価されスティービー国際賞PRセキュリティ部門のゴールド賞を受賞されたとのことであった。

### 2. 千年希望の丘・森の防潮堤 ・・・事務局長園田 義明（写真）さんの案内です

宮城県岩沼市は東日本大震災後、岩沼にいのちを守る森「千年希望の丘」構想を策定し、その実現までには種々の紆余曲折を経て、現在計画15基の内、現在までに3基を建設した。（震災から現在までの過程は震災当時の岩沼市長で復興に尽力された井口経明氏の著書「千年希望の丘」のものがたり（プレスアート社刊）に詳しく述べられているので一読をおすすめする。）

輪王寺住職日置道隆さんは森の防潮堤協会理事長に就任し、千年希望の丘に海岸線に生えるべきいろいろな種類のふるさとの木々を市民の力で植樹することで森の力を再生する活動を進めておられる。



1号丘には被災者鎮魂のための鐘が設けられ、平成27年3月13日天皇・皇后両陛下がおいでになり供花され冥福を祈られたとのこと。私たちも杢三氏が鎮魂の鐘を鳴らし黙祷を捧げた。

植樹祭は今年で3回目で平成25年3万本、26年7万本、27年5万本 計15万本を植栽した。来年度は4回目の植樹祭を5月28日に行い10万本を植える計画なので、是非来所願いたいとのこと。植樹する苗木は輪王寺境内や、全国の有志が育てたポット苗とのこと。50年、100年後の未来に残せるいい森に育てて行きたいと抱負を述べられた。私たちもその実現を願いつつお別れした。